

KASHIWAZAKI-KARINAWA  
Special Interview  
新潟で働く  
私たちの思い  
Vol. 02  
NUCLEAR POWER STATION

安全対策に新しい視点を。  
そして、見えてきたもの。



中田エミリー  
新潟出身。NST新潟総合テレビを経て、現在フリー。  
その明るいキャラクターで活躍中の人気のアナウンサー。

東京電力ホールディングス  
柏崎刈羽原子力発電所  
第一保全部電気機器(1・4号)グループ

中田 エミリー × 齋藤 晴樹

みなさんこんにちは。中田エミリーです。新潟に暮らす私たちにとって、近くに原子力発電所があるのってなんだか心配ですよね。だから、直接話を聞きに来ちゃいました。柏崎刈羽原子力発電所。前回は、津波や浸水の対策に取り組み40代の所員さんにお話を伺いました。そして今回は、ガラッと変わって、若手所員さんに突撃しちゃいます。20代の若者から見る原子力発電所って、どんなところなんだろう。

**事故後なのになぜ原子力発電所で働きたいと思ったんですか？**

**中田** 齋藤さん、今日はいろいろ聞いていますけど、よろしくお願ひします。まず、いきなりですが、齋藤さん、すごくお若いですよ。齋藤 はい。平成26年に入社したので、今年で4年目になります。

**中田** ということは、福島第一原子力発電所の事故のあとですか？

**齋藤** はい。事故後に採用が再開してから、最初の新入社員です。

**中田** そういふ時だとご家族とか周りの人は反対したんじゃないですか？

**齋藤** 反対はされませんでした。やっぱり心配はされました。

**中田** それなのになぜ入社されたんですか？

**齋藤** 私は大学でエネルギーについて学んでいたんですが、学ばずば学ばず、資源をほとんど持たない日本にとって、原子力発電が果たす役割はとて大きいと感じるようになりました。ですから、事故後、信頼が失われてしまった原子力発電をもう一度安心して活用できるようにするために役に立たないかと思って入社しました。

**中田** 若いのにちゃんと考えているんですね。すごい。パチパチパチパチ

**齋藤** そ、そうですか。

**若手の所員って、どんな仕事をしているんですか？**

**中田** 齋藤さんは、今はどんな仕事をしているんですか？

**齋藤** 今は、緊急時の電源対策に携わっています。

**中田** 緊急時の電源対策って何ですか？

**齋藤** 福島第一の事故では、津波ですべての電源が失われて原子炉を冷やすことができなかった。その反省をふまえ、万が一の場合でも電源を確保できるようにするのが私の仕事です。具体的には、ガスタービン発電機車の強化などがそうです。発電機車は、津波の被害に遭わないように、高台に分散して配備されています。

が、さらに、巨大地震があっても耐えられるように、耐震補強を行っています。私のチームはその設計を担当しています。他には、大きな竜巻が起これば飛ばされないようにしっかりと固定したり、発電機の起動スイッチを遠隔

操作できるようにしたりと、どんな災害が起きても電源を確保できるように対策を進めています。

**中田** それってとても重要な対策じゃないですか。その設計に若い齋藤さんが携わっているなんてすごいですね。

**齋藤** 難しい問題を前に悩むことも多いんですが、私の部署の上司や先輩は、若い私たちの疑問にいつも耳を傾けてくれますし、解決策を導き出すために、とことん議論に付き合ってくれます。そのおかげで自分の設計したものを形にすることができています。

**中田** それはやりがいを感じますよね？

**齋藤** そうですね。やりがいはもちろんあります。また、先入観や前例にとらわれず新しい視点で設計や改善を行うことは、私たち若手にしかできないことだと思うので、より高いレベルの安全を目指すためにも、積極的に取り組んでいかねばならないと感じています。

**中田** そうなんですか。これからの仕事の目標はありますか？

**齋藤** 自分が携わる一つひとつの安全対策に決して妥協せず、とことん高いレベルを追求して、新潟のみならず安心していただけようような発電所を作っていきたいと思っています。

**これからの発電所に必要なものって、何ですか？**

**中田** 今の取り組みはお聞きしたんですけど、若手だからこそその視点で、これからやってみてほしいことはありますか？

**齋藤** 最近思っているのは、新潟のみならずとのコミュニケーションです。

**中田** コミュニケーション、足りてないですね。発電所が何をやっているのか、まだまだ私たちにはわからないですもんね。

**齋藤** 発電所の取り組みは、技術的な話も多いので、お伝えするのはなかなか簡単ではないと思いますが、特にこれからの新潟を支える自分たちと同じ若い世代の人たちに興味を持ってもらうためにも、もっと私たち若手が積極的に情報発信をしていって、理解してもらえようようにしていきたいと思っています。

そして、良いことも悪いこともどんどんコミュニケーションできるような関係を、新潟のみならずと作っていきたくと思っています。

**中田** そんな関係になれるといいですよ。齋藤 はい、がんばります。

